

サロン・あべの

<サロン・あべの> NO. 8
発行日 昭和62年2月21日(土)
発行者 <川口・あべの>運営委員会

女性 障害者と職業 一月の出合い

男女雇用均等法なるものが出来た。もちろん障害をもつ女性として法律の枠外にあるものではない。へサロン・あべのの「一月の出合い」は題して「女性障害者と職場」パネラーはへサロン・あべのの運営委員山本篤江さんにご登壇願いました。

彼女の勤務スケジュールはギンシリ決まっている。火曜日——六年前に仲間たちと開設した「ニッティングサロン」(早川福祉社会館)東住基の教壇に立って、手編み、杖織、編みなどの基礎から応用まで、本科三年、専門科三年、講師科四年というカリキュラムを組んで教えている。

水曜日——手造りの品、手芸品などを売る店で、接客に自分の経験を生かして、シヨップアシスタントガールとして店頭立つ。土曜日——母校、養護学校で「土曜クラブ」の臨時職員として後輩の育成に当たっている。

健常者となんり変わりなく仕事を持ち、通勤する山本さんはこれに到るほどの大へんさについて、フギのように語った。重度障害者が職を持つ以前に、家から出る事がいと苦勞。家族にいてみれば、一人での外出は危険と過保護な返に家の中にとどめておこうとする。これを

グループは「生き物」(二)

前回、グループ活動の「生命」は、プログラムにあると述べた。そして、プログラムづくりの原則は、①メンバーの必要性に応じて、②メンバーの人間関係の能力に合わせ、③メンバーが個性を発揮できて、④メンバー間の交流が最大限可能になるようにするということだった。

まず、①メンバーの必要性に応じるというのは、メンバーがいったい何を求めているのか、グループに参加しているのかを、キッチンとつかんだうえで、プログラムをつくらなければいけないということである。

ところが、運営委員はしばしば、自分たちだけの希望や「好み」、また「その方が都合がいい」といったことで、次のプログラムを決めてしまいがちである。運営委員がグループに期待するものと、そうではないメンバーが期待するものとの間には、いつも微妙なズレがあると覚悟しておくべき

だろう。

そのズレがどこからくるものであるかは難しい問題であり、ここでは述べないが、「メンバーが何を求めてグループに参加しているのか」という問題も、それに負けないぐらい難しい問題であると思う。

「あなたは何を望んでサロンに来ていたのですか」と質問すれば、そのまま答えが返ってくることは考えられない。本音が出るのはかなりの信頼関係ができてからのことであって、望んでいるものがそこに無ければ、信頼関係ができる以前に立ち去ってしまうからである。

この難問を解くカギは「グループを観察する」ということである。運営委員は、グループ活動の最中でも、それにのめりこんでしまわずに、冷めた目でグループ全体を見渡し、観察によってメンバーの本音を探ろうとすることが大切だろう。運営委員って、つらいのよねー (知)

なんとか説得して「心臓に毛が生えとよん」とちやうか「ヒいしめる」のが大仕事。苦勞して、苦勞して、やつの思いで外へ出る。晴天ばかりならいいが降る日もある。インコト姿の電動車椅子に向けられる視線は、ほとんど「サレこまでせんでエムのに」

「(同情的に)大へんヤナ」である。冷たかったり、へんに同情的な視線に「一般の通勤者も、雨が降らうかが槍が降らうかが、怀むわけにはいかなないでしよう」と視線を返す。そして胸の中で大きく「自分には自分も待ってくれている生徒がいる」といふことに力を感ぜ、そして



また「出勤しなければ、店は南かないのだ」という仕事への責任感があればこそ、「」とつけ加える。女性障害者に限らず、障害者の仕事に対する情熱、責任感、健常者との違いをなんり変りない。当り前のことだが、あえて理解してほしい。と結んだ。

地域の

ボランティア

活動って？

大阪北区にある山西福祉記念館において、昭和六二年二月一日(日)午前10時〜午後三時、大阪市ボランティア活動推進協議会と大阪市社会福祉協議会主催の、ボランティア活動推進協議会主催の「ボランティアの明日をみんなで考えよう」が開催されました。

午前中は、ディスカッションで五人のパネラーが紹介され、各自の活動内容が報告されました。最初は、全盲の子供の遊び場とおもちゃを捜し求めていく中から「おもちゃライブラリー活動」を知り、校下社協や地域の人達との協力で、住吉川おもちゃ図書館「ピッコロ」を開設して今その友の会の代表として活動されている杉本和子氏の話から入りました。障害児を対象に開いた「ピッコロ」でしたが、今では健常児も多く遊びに来るようになり、お互いに遊びの中から学びあうことが出来てきたことと、親どうしの話あえる場を持つたことが嬉しいと言われました。

次に短期の里親となるグループ・ホームふれあいの家に昭和五八年より関わっている志村弘氏の報告がありました。里親として日常生活活動からその子供のことを一番に考えて、常に実親に子供のことを訴え続けていき、一日でも早く親と生活出来る日を迎えさせたいと言われていました。短期に入っている子供の中には、地域で面倒をみてもらいたい子供もいます。各区にグループ・ホームの設置を訴えていきたいと言われました。

三人目は、大和川老人会の会員である川口清氏に老人の一人暮らしとボランティアさん

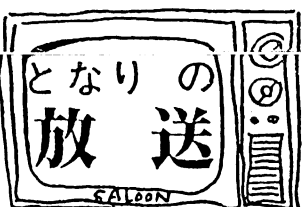
との関わりについて話をしていた。

川口氏は八六才になるおばあちゃんて三人の子供を独立させて現在、団地で一人暮らししている。元気な時はボランティアとして活動してきたが、今はリウマチとの闘病生活で老人会のボランティアを受けて生活を送っている。趣味も広く友人も多く張のある生活を送っています。とお元気なよく通る声で話されていたのが印象的でした。四人目は、阿倍野区のボランティア・グループ「友愛」の活動報告が網谷保子氏から報告されました。昭和四九年より友愛訪問活動が始まりましたが、活動はなかなか容易には進まず苦勞をされたそうです。最初は一人住いの老人の話しを聞くだけの訪問であったが、今は在宅ケアが求められるようになりその対応にも早くから取り組まれているそうです。安心してお互いに年よりになれる地域社会を目標に活動を続けていきたいと報告されました。

最後は障害福祉情報センターの春山満氏が障害者になってはじめて医療や器具等の情報が少ないことを知り、それらの情報を集め確かめ、関係者も含め一五〇〇部提供しているそうです。当事者だけでなく広く関係者を巻き込んだ爽やかな運動を目指していると言っておられました。

午後からは、参加者の発言を求めみんなで地域福祉のありかたや今後のボランティアの活動内容が話し合われました。

ハサロン・あべのVからは、旭さん、石田さん、長尾さんと富田の四人が参加しました。老人から障害者、子供まで地域の中で地域の人達との関わりを求めている今日、ボランティアの役割の重さを改めて感じました。



阿倍野 たんぽぽ作業所を 訪ねて

二月四日(水)午後、立春というのに小雪がちらつく中、あべのボランティア・ビューローの前田さんと昨年二月八日阿倍野区阪南町六一〇一七に開所された「阿倍野たんぽぽ作業所」を訪ねました。現在、作業所には、障害を持つ仲間達(女一人、男三人)が通って来ています。大和川学園から阿武尚信先生が指導に来ておられます。その他、後援会、保護者のお母さま方がお手伝いに来て作業が進められています。作業は簡単な紙箱の組立てやクッキー作りの練習をしたり、砂糖の箱詰め等をしているそうです。又、店舗スペースには他の作業所の仲間達が作った手作り品(陶器、ブラシ)や後援会のお母さん達が作った作品(手さげ袋、マスコット)も展示販売しています。これらの物品販売の収益金は作業所の運営費や仲間の給料に当てられます。

私達がお訪ねしたときは、紙箱作りを慣れた手でおられました。皆さん、仕事の手を休めることなく、にこやかに迎えて下さりいろいろな質問にも答えて下さいました。試食にと手作りクッキーとコーヒーをご馳走になりました。因みにこのクッキーは一五〇円、コーヒーは一〇〇円で販売。近くジュースのメニューを増やす予定もあるようです。地域の作業所としてこれからの活動を期待すると共に、私達も陰ながら応援し、共に生きる地域社会をめざしていきたいものと思えます。

PROFILE

山本篤江さん

学生時代を知る友人からは「ロは達者、手先は器用、世の強さは抜群、それにカワイイ子や、」と、今も彼女の活躍ぶりを裏づける答が返ってくる。

ロハTで、エネルギーに行動し、キビシク生徒を教える先生。生徒からの人望も厚い。彼女に会うとき、私に楽しみを以ていふことがひとつある。それは彼女の素晴らしいお化粧である。実に上手い。心算はもうろく人出掛ける先、着る服などT.P.Oに合わせているあたり、そんなじよ、レニの美内容コンサルタントも顔負け。今度(会)とキ、レニのロファイルのこと、彼女、南口(米田)なんていうやろ。フザに会うときの楽しみが増えた。

三月の出会い

日時 三月十四日(土)PM10:00-11:00
 場所 春日徳コミュニケーションセンター(二階(スロープ有))
 テーマ おかしくと困んで
 会費 三〇〇円
 連絡先 石田田(六九)一〇二八